



2003.11
文楽
 BUNRAKU
 无形文化遺産
 Intangible Cultural Heritage

尾道市制施行百二十周年記念

文楽

人形浄瑠璃

平成31年
3月9日 土
 しまなみ交流館

入場料 昼・夜の部 各 3,000円
 (全席自由) 昼夜通し券 5,000円

※未就学児の入場はご遠慮ください。

※解説・字幕付き

昼の部

開演 13:30
 開場 13:00
 上演時間 約2時間45分

よし つね せん ぼん ざくら
義経千本桜

しい き
椎の木の段

すしやの段

夜の部

開演 18:00
 開場 17:30
 上演時間 約2時間20分

よし つね せん ぼん ざくら
義経千本桜

みちゆき はつねのたび
道行初音旅

しん ぼん うた ざいもん
新版歌祭文

の さきむら
野崎村の段

写真：青木信二

※字幕表示がございます。席によっては字幕が見えにくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。
 ※出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。あらかじめご了承ください。
 ※開演中の写真撮影・録音録音ならびに携帯電話・スマートフォン等の使用は固くお断りいたします。

チケット
 販売開始
 1月9日

尾道市：しまなみ交流館、ベル・カントホール、おのみちバス駅前バスセンター、マスハラ楽器、啓文社新浜店
 坂井文具店、道の駅クロスロードみつぎ
 三原市：ワタナベ楽器三原本店、啓文社イオン三原店
 福山市：スガナミ楽器、啓文社コア福山西店、啓文社ポートプラザ店、啓文社 BOOKS PLUS 緑町、啓文社コア神辺店
 啓文社コア春日店
 チケットぴあ TEL0570-02-9999 Pコード 491048

お問合せ しまなみ交流館 TEL0848-25-4073 (火曜日休館) 〒722-0036 広島県尾道市東御所町 10-1

主催：尾道市／公益財団法人文楽協会／中国新聞備後本社 後援：文化庁 助成：芸術文化振興基金／朝日新聞文化財団



人形浄瑠璃 文楽 配役表

《昼の部》解説（あらすじを中心に） 豊竹芳穂太夫

義経千本桜

【すしやの段】

よし つね せん ぼん ざくら	権太伴善太	吉田 義悠
口 竹本南都太夫	権太女房小仙	桐竹 紋吉
鶴澤 燕三	主馬小金吾武里	吉田 玉勢
豊竹 咲太夫	六代君	吉田 玉彦
鶴澤 清志郎	若葉の内侍	桐竹 紋臣
	いがみの権太	吉田 玉男
	娘お里	吉田 雲二郎
前 竹本津駒太夫	弥左衛門女房	桐竹 勘壽
竹澤 宗助	弥助美奈	吉田 和生
後 竹本織太夫	平維盛	吉田 清五郎
鶴澤 清志郎	すしや弥左衛門	吉田 清五郎
	梶原平三景時	大ぜい
	すし買	大ぜい
	村の役人	大ぜい
	軍兵	大ぜい



写真 青木信一

望月太明蔵社中

《夜の部》解説（あらすじを中心に） 竹本小住太夫

義経千本桜

【道行初音旅】

よし つね せん ぼん ざくら	静御前	吉田 文昇
みちゆきはつねのたび	豊竹芳穂太夫	吉田 文昇
静御前	豊竹靖太夫	吉田 清五郎
狐忠信	豊竹靖太夫	吉田 清五郎
ツレ 竹本碩太夫	鶴澤 清旭	吉田 清五郎
	鶴澤 寛太郎	
	野澤 錦吾	
	鶴澤 燕二郎	
しん ぼん うた さい もん	娘おみつ	豊松 清十郎
のさきむら	手代小助	桐竹 紋臣
中 竹本碩太夫	丁稚久松	吉田 玉佳
豊澤 富助	親久作	吉田 玉也
前 竹本小住太夫	下女およし	吉田 玉延
野澤 勝平	娘お染	吉田 一輔
後 豊竹靖太夫	駕籠屋	吉田 玉路
野澤 錦系	駕籠屋	吉田 和馬
鶴澤 寛太郎	船頭	吉田 玉登

新版歌祭文

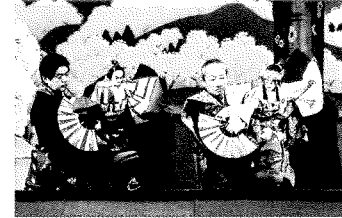


写真 青木信一

望月太明蔵社中

義経千本桜 権の木の段・すしやの段
源義経によって平家は滅亡。しかし、平重盛の嫡子維盛は生きていて高野山に入ったと噂。都の近くを身を潜めていた維盛の妻若葉の内侍と若君を連れ、主馬小金吾武里（しゆめのかきんごたけさと）が高野へと向かいますが、途中、吉野の下市村で、親からも勘当された悪者、いがみの権太に金をゆすり取られた上、追手にあい、討死。実は、維盛は、かつて重盛に恩を受けた弥左衛門、つまり権太の父の店で、奉公人の弥助として匿われていました。事情を知らない妹お里は、父が熊野浦から連れて来た弥助に首ったけ、今夜の祝言が来してみやまません。けれども、内侍が宿を求めて訪れ、真実が明らかになり、一生連れ添うつもりでいた夫を失ったお里の慟哭。そこへ、弥助の正体を見抜いた源頼朝の家臣藤原原時が、妹の逃がした維盛夫婦を追い、戻ってきた権太が差し出したのは、縄をかけた内侍と若君そして、維盛の首。手柄をほめ、梶原が去るや、怒って権太を刺す父が、内侍、若君と見えたのは、権太の妻子、首は、弥左衛門が偶然遺体を見つけた維盛の身代わりだとひそかに持ち帰っていた小金吾の首。権太は、たまたま弥助の正体を知って心を改め、愛しい妻子を身代わりにして、維盛一家を助けたのでした。

そのころが、昔、重盛に命を救われた頼朝の本心は、維盛を助け、出家させることだったと判明。妻子を犠牲にする必要などなかった。権太は、今の死に様も悪の報いだと悟り、これまでの悪事を悔いて絶命。維盛は髻（もとどり）を切り、家族と別れ、高野へ。人形浄瑠璃の全盛期、延享四年（1747）、竹本座初演。竹田出雲（二代）、三好松洛、並木千柳による五段続きの時代物で、『菅原伝授手習鑑』『仮名手本忠臣蔵』とともに浄瑠璃三大傑作に数えられています。昼の部でご覧いただくのは、全篇の山場となる三段目、『平家物語』に見られる維盛の物語。源平の合戦の最中、戦場を離れ、都に残した妻子を恋慕しつつ、高野で出家し、那智の沖で入水しを踏まえ、「すしや」では、現在も奈良県吉野郡下市町で営業されている「つるべすし弥助」を舞台としています。

義経千本桜 道行初音旅
大和の源九郎狐（げんくろうぎつね）の言い伝えを取り入れた四段目の華麗な道行。道行の最高傑作といわれ、聞きどころ、見どころ、たつぷりです。平家を滅ぼしたのち、謀反を疑われ、頼朝に追われる義経は、吉野山に潜伏。それを知った愛妾静御前が、義経の家来佐藤忠信を供して、吉野をめざして大和路を旅します。満開の桜の中、義経を思っで静が打つ鼓「初音」は、大昔、雨乞いのために雌雄の狐の軍で作られ、義経が法皇から賜わり、静に形見として与えたもの。実は、この忠信は鼓の子、つまり狐。狐独特の表現や早歩きもお楽しみください。

新版歌祭文 野崎村の段
大店の娘お染と丁稚久松の、許されない主従の恋。しかも、お染には結婚の決まり、久松には、養ひ親久作の妻の連れ子、おみつという、許婚がいまいた。この恋の行く末を心配し、また孝行なおみつの幸せを願う久作は、店で失敗した久松が実家に戻されたのを幸い、おみつと祝言をあげさせることに待ちに待った祝言が突然決まり、おみつは大喜び。ところが、久松を追ってお染が……。あくまでも恋を貫こうとするお染。その強い思いに打たれ、一度は恋を諦めた久松も、一緒になれなければ死ぬとの意を再び固めます。久作は、道ならぬ恋を思い切るよう説得。涙ながらに別れを約束する二人。しかし、おみつは、心中の覚悟を見抜き、二人を添わせるため、自身の幸せを諦めて尼に……。安永九年（1780）、竹本座初演。お染・久松の心中（1710）を題材とし、新たな悲恋を盛り込んだ、近松半二の上下二巻の世話物で、上の巻の「野崎村」は文楽の代表的な演目のひとつ。お染の美しいクドキや、お染と久松が船と駕籠とに別れて野崎村（大阪府大東市）から大坂へと去っていく段切の、華やかで躍動的な三味線は大変有名です。

尾道と文楽

文化文政（1804～1830年）の頃、尾道では大阪から植村文楽軒（1810年没）や初代竹本弥太夫（1820年没）を招き、人形浄瑠璃を教わっていました。二人の死後、尾道の弟子たちは現在の海龍寺に供養塔を建て追慕しました。大阪以外に供養塔があることは大変珍しく、当時の尾道商人の隆盛ぶりが伺える出来事です。人形浄瑠璃文楽は、尾道と強い繋がりのある伝統芸能なのです。

しまなみ交流館までの交通アクセス

- お車で
山陽自動車道「尾道IC」より約20分
- JRで
JR山陽本線「尾道駅下車」徒歩2分
山陽新幹線「新尾道駅」下車、路線バス約15分

